

世代間継承と世代間革新のあいだで 日仏のちがいはどこにあるか

棚 沢 直 子

目 次

- 1 はじめに
- 2 性社会関係、その理論構築の行程
- 3 世代社会関係の諸特性
- 4 世代間の権力問題
- 5 おわりに

1 はじめに

日本でもフランスでも少子高齢化の問題にどう対処するかは、現代において社会科学系のさまざまな学問分野の緊急な課題になっています。今日、「依存者たちのゆくえ 世代間の絆をどうつくり直すか」と題して日仏シンポジウムを開催するのも、両国のこうした社会変化を世代問題から比較し考えたいからです。

しかし、世代という用語について言えば、日本では現代の少子高齢化の問題が起こる以前から、よく使われていました。近代の核家族化は日本では 1960 年代から始まりましたが、この核家族化を 1980 年代の日本のフェミニストたちはエドワード・ショーターに倣って「近代家族の誕生」と呼んでいました。とはいえ、日本のあり方は単に三世代が同居しなくなっただけで、フランスの社会学者たちの間で慣例になっている「夫婦家族」とか「カップルを中心とした家族」とかの命名が使われることは、ついに一度もありませんでした。つまり日本では「近代家族」とは「二世代家族」のことであり、この呼び方のほうが、フェミニスト以外の当時の社会学者の間では、むしろ通常のことだったのです。家族について、フランスでは男女関係を中心に、日本では世代関係を中心に考える。このちがいの意味するところの広がりや深さはどこまで測れるのか。これが今日の私

の課題です。そのために私は世代関係をフランスの社会関係理論の中に位置づけることから始めます。日本の社会学分野では、世代という用語を中心概念として理論構築することは、これまでありませんでしたから。

2 性社会関係，その理論構築の行程

フランスでは、1980年代からフェミニスト社会学者たちの間で、英語圏のジェンダーに代わって「性社会関係」なる用語でフェミニズムを理論化していこうという動きが始まりました。その成果は『性社会関係について、理論構築の行程』(Battagliola, Fr. [1986]) にまとめられています。この本は、フランスのウーマン・リブから始まるフェミニズム理論構築がマルクス主義の階級理論を出発点にしたこと、以後 15 年の行程があることを明らかにし、その延長上に性社会関係理論が打ち立てられるだろうことを表明をしています。もちろん日本でも有名なクリスティーヌ・デルフィーの理論はこの行程の中に位置づけられています。

では、階級と性とに共通するところはこの本によれば何でしょうか。ここでは、ビールさんの発表の用語を一部使わせていただきながら、私がこの本を読んで引き出した共通するところを三つにまとめてみましょう。

第一は、階級も性も、実体ではなく関係の中にしか存在しないこと。資本家は労働者との、男は女との関係の中にしか存在できないということです。

第二は、この関係は社会関係であること。階級が社会的なものであるのは自明ですが、男女もまた社会の産物である。この本は男女が自然（生物的なもの）を基礎にしてできた関係でないことを論証するのに全ページの 3 分の 1 を費やしています。

第三に、これら二つの社会関係は、力関係、権力関係、支配抑圧関係であること。

このように論じた後、男女が権力関係、支配関係から脱け出す方法論を展開していきます。この本もビールさんの方法論も階級と同じように男女を二項に分化し、この二項の関係を対立矛盾と捉え、ここからこれまでの男女関係が崩壊するような社会変化を探っていくというアプローチがとられています。

3 世代社会関係の諸特性

さて、この本では世代についてほとんど何も言っていません。2001 年 11 月にストラスブールで今回のシンポジウムの準備のためにワークショップを開催したとき、フランスで世代という用語がかなりの頻度で使われ出したのは 1992 - 3 年だと聞きましたので、この本の問題意識の中に世

代という概念がないのは当然でしょう。だから、ここからが私の出番です。

では、世代に階級や性と共通するところがあるでしょうか。私の答えはイエス・アンド・ノーです。

イエスのところ、それは第一に世代こそが関係であること。世代は実体では全くありません。子どもは大人との関係によってはじめて子どもになります。第二に、世代関係は年齢にかかわるので男女関係よりもさらに自然的（生物学的）にできあがると思われがちですが、世代は社会の中で考えることができるし、また考えるべきであること。今回の皆さんの発表は、すべて世代を社会関係として捉えているはずで、世代の自然的にみえる部分は、必ず社会的な意味づけがされています。

ところで、世代もまた、階級や性のように力関係、権力関係でしょうか。私はそうと思いますが、今回の皆さんの発表ではこのことが強調されていません。むしろ相互援助の関係と言われたりしています。とくにフランスの方々には世代間の連帯という用語を使って発表なさるでしょう。せいぜい連帯の裏にある葛藤に言及なさるだけで、権力関係についてはお話しになりません。なぜか。このことについては後で述べます。

とにかく世代社会関係を連帯という二項の関係そして葛藤という二項の対立矛盾とし、そこから社会変化や社会変動を見ていくという方法論が、とくにフランスの方々の多くの発表でなされるでしょう。

この方法論のおかげで、フランスと日本がともに少子高齢化という現代的な問題を抱え、日本がさらにフランスに近づき、フランスがさらに日本に似てきたところを、階級関係や性関係よりもはるかに、世代関係の分析が見せてくれるのではないのでしょうか。まさにここにこそ今回の日仏シンポジウムの意義の大きな部分がまずあることを、私は声を大にして言いたいと思います。

しかし、私の役割はもっと先鋭的なところにあります。私は今回のシンポジウムの発表者の中で唯一ひとり人文科学系です。そして女性研究に長いこと従事し、日本においてはフランスの専門家で通っています。私は世代社会関係を理論構築するにあたって階級と性の両関係とはちがうところを出発点にしたいと思っています。

私が思うに、人文科学というものは社会科学より先鋭的です。私はこの先鋭さをもって性社会関係を理論構築するフランスのフェミニストたちの方法とはむしろ逆に、世代社会関係から性社会関係を見直していきたい、性社会関係が階級関係の理論枠組から出られないところを見定めたいのです。だから私が女性研究というときには、その中でももちろん性社会関係の分析やその他のフェミニズム理論を含めたいと思いますが、それだけではなく、それらを超えたところに自分の女性研究を位置づけたいと思っています。世代関係の分析には、それらを超える理論枠組が必要だと私は思っていますから。

私はまた日本に居住していて、フランス思想が切り取ってこなかった「現実」を見続けてきました。その「現実」は何も日本にあるだけでなく、フランスにもあるはずですが見えてないだけだと思い続けてきました。それを世代社会関係の分析で見たいのです。

では、世代は性や階級とどこがちがうのでしょうか。この関係は、性や階級が水平的であるのとはちがって、時間性の中で垂直的です。この垂直的の意味するところは、実は《革命的》ではないか。もしかしたら西欧近代の全思想を根底のところで転倒させてしまうのではないかと思えるほどなのです。例えば、フランスの個人という概念の基礎にある人権宣言を問い直すほどの意味があるのではないか。

そもそも、ふつう「世代」と訳されているフランス語の *génération* という語そのもののの中に、すでに深い意味があると思えてなりません。*génération* とは *classe d'âge* 「年齢層」のことである。そのとおりです。しかし、*génération* の第一の意味は実は「生成すること」であって、*production* 「生み出すこと」、*formation* 「形成すること」、*création* 「創造すること」、ひいては *innovation* 「革新すること」に近いのです。ふつう世代と言えば、皆さんはすぐ継承のことを思い浮かべるでしょう。これは日本でもフランスでも同じです。しかし *génération* が含むすべての意味を考えれば、それは「個人が年齢層を順々に生きる中で、継承と革新とを同時に行うこと」となるのではないのでしょうか。フランソワーズ・コランは、*innovation* の代わりに *novation* (MAXIDICO 参照) という語を見つけてきました。感心したので、以後これを使わせていただきます (Collin, Fr. [1999] p. 208)。

私が思うに、世代社会関係を分析するにあたって階級や性のように二項の設定がたとえ許されるとしても、その二項の関係は水平関係におかれた階級とか性とは全くちがいます。敵対、対立の関係ではありません。世代間では、継承そのもの《の中に》革新があり、時間性という連続そのもの《の中に》非連続あるいは断絶ひいては新しさがあるのです。言い換えれば、世代間では継承《と同時に》革新が、連続《と同時に》断絶が、日々なされていく。これは脱構築論者つまり解体論者デリダが晩年近くになってようやく *héritage* 「相続」を強調し始めたのに少し通じています (Derrida, J. [2001] pp. 11-40)。しかし、ブルデューの象徴資本とか再生産という、同じものが継承だけされていくような発想とは、基本的にちがうものです。とにかく世代関係の中の二項が敵対しないからこそ継承があり、その継承の中にしか革新はないことが重要なところです。

私が言いたいのは、垂直関係の分析を出発点にする社会変化理論には、これまでの西欧の *dialectique* 論理とは全くちがう、つまりコランの言うように「対立矛盾の論理から脱け出す」(Collin, Fr. [1995]) ような、別の新しい *dialectique* を考える必要があるのではないかということです。

私は先ほど挙げた性社会関係の理論構築の行程の本を読みながら、社会変化の分析について、

ひとつの矛盾あるいはアポリアのようなものがあるのに気づきました。性関係が自然的な関係でないなら、運命でない、女の位置は変化しうるはずなのに、その変化の歴史がどうしても書けていない (Battagliola, Fr. [1986] p. 105, "(...) des travaux historiques (...) nécessaires à l'élaboration d'une histoire des rapports de sexe, de cette histoire elle-même qui reste à écrire") という矛盾です。ここにあるのは、資本主義の到来以後の社会変化の中で、新しいかたちの、しかし同じような男女不平等を見つけ出して告発するのを永久に再生産していくアプローチでしかないのです。もしかしたら、どこかにまだマルクス主義的なユートピアの影があるからなのではと思いたくなってしまいます。性社会関係を階級関係の理論枠組の応用でなく、新しい dialectique の中で考えればその変化の歴史が書けるかもしれないのに。その萌芽はわずかに母娘関係の分析で見えてはいますが (Op. cit., pp. 194-195)。

垂直な世代社会関係の中の二項は敵対していないなら、少なくとも平等であるといえるだろうか。この答えもまたイエス・アンド・ノーです。

イエスの部分について、とくに社会の中で労働力として市場にいる若者と中高年の間は、平等か平等に近い関係になりうるのではないか。身体的に一方が勝る場合も、精神的に他方が勝る場合も、また労働の熟練度で、あるいは技術の革新度で勝る場合もありますが、だいたい平等に近く、平等と考えなくてはならない。このように平等に近い場合は、世代を水平関係に近い用語で、つまり葛藤と連帯の関係として見ることでできるでしょう。

しかし問題は世代関係の二項が、平等でない、どうしても平等になれないノーの場合です。この場合は労働力として市場に出ていけないひとたちのことを、考えなければなりません。福祉分野以外のこれまでの社会科学では、ほとんど完璧に近く無視されてきた「他者に依存しなければ生きていけないひとたち」のことです。西欧にせよ日本にせよ、近代社会はこうした「依存者たち」を切り捨てて、あるいは見えないところ、つまり家庭という私領域に押し込めて成り立っています。西欧的な個人の概念も「依存者たち」のことを考えていません。たとえば、あの有名な人権宣言「人間は生まれながらに自由で平等である権利を有する」という発想も、権利としてはたしかにその通りです。しかし、実際は、人間は、生まれてから長いこと、誰かに依存しなければ生きていけません。ということは、依存する側もされる側も、自分のもつべき自由と平等が、長い間にわたって疎外されるのではないのでしょうか。すべての人間が誕生して生きる出発点には、他者に依存した記憶があります。これまで西欧の社会科学の分野で概念化が全くされてこなかったこうした「依存者たち」の存在は、私が思うに、今のところ世代関係の分析からしか、さらに世代を社会関係と捉えることからしか、見えてこないのではないかと。

4 世代間の権力問題

こうした「依存者たち」、乳児、幼児、重度知的障害者、アルツハイマー型の高齢者などのうちでも、とくにすべての人間の出発点である、ほとんど無力な世代と呼べる乳児ならびに幼児の側と、その世話労働をしなければならない側という二項を念頭において、さらに世代関係を考えてみます。

この二項間の分離の境界線は明確ではありません。個人間 それぞれ *individu* 「個体」であるはずの間柄が、うまく分離できていない。とくに無力な乳児の側は、他者のもつ他者性を受け入れること、言ってみれば他者に自己同一化することでしか自己形成の一步が踏み出せない。*hétéronomie* 「他律性」の中で生きていく他はない。また世話労働を提供する側は、無力な相手が *hétéronomie* の中でしか自己形成できないのを想像し理解しない限り、世話労働を全うすることができません。この意味で世話労働を提供する側も、明らかに *autonomie* 「自律性」つまり自由のかなりの部分を捨てなければなりません。(もっともこのように分離の境界線が明確でないからこそ、時間性の中で継承が順調になされていくわけですが。)

こうした依存者と世話労働の提供者との関係には、必ず力の問題が入りこみます。なぜなら、世話労働は、援助労働と呼びかえてもいいですが、相互援助では全くなく一方通行の労働だからです。その関係は、労働《力》の一方通行の提供で成り立っているからです。

いったん世代関係を力関係と捉えてみれば、今さらながら近代以前そして以後も家父長制が続く間は、世代関係がとくに父息子間に象徴される支配関係だったことを思い出します。それだからこそ、西欧近代の全思想は、自由と平等を価値づけるために、世代間にある力関係を見ないようにして私領域に閉じ込めてしまったのでしょう。近代になって私領域に閉じ込められたものは、フェミニストたちが言うような男女関係だけではありませんでした。私にとっては、私領域に閉じ込められた男女関係よりも世代関係の分析の方が、はるかに重要です。なぜなら、これまでのフェミニズム理論ではどうしても概念化できなかった依存者とその世話労働の提供者との関係こそが、人間関係における権力問題の原点になると私には思えるからです。

これまでの理論では、乳児、幼児とその世話をする人たちの関係を考察の中心にした分析はほとんどありません。「依存者」「世話労働」などの概念用語さえ確立していません。わずかに「ケア」なる語が最近で始めましたが、これも乳児、幼児とその世話する人たちの人間関係を中心に発想していません。ましてや、この関係における権力問題の考察など皆無であるのが現状です。いわばタブーだったのです。なぜタブーだったのか。それは、フェミニズムの戦略上、女の、とくに母のもつだろう権力に言及することがフェミニストたちにとってまずいことになるとわかっているからです。

しかし、私から見れば、この世代関係を社会関係理論として構築しないかぎり、つまりこれまで見ないようにしてきた、どうしても平等になれないひとたちに照明をあてた権力問題を分析しないかぎり、新しい平等理論の可能性は生まれてきません。男女関係だけを見つめてできた平等理論は完全に行き詰まっています。

どうしても平等になれない世代関係のことをもうすこし考えてみましょう。この関係はたしかに力関係ですが、それがすぐさま支配抑圧関係になるでしょうか。西欧現代は、世代関係が支配抑圧の権力関係ではないと決めてしまう概念装置をつくり出して、世代間の権力問題を考えないようにしました。それが、あの *autorité parentale* 「親権」なる概念です。しかし、この装置ですべて終わりというわけではありません。なぜなら、親による児童虐待が極めて現代的な問題になるほど、世代間には権力行使と呼ばないまでも権力濫用が頻繁に発生するからです。さらに、病人、高齢者に対しても、本人の了解なしに世話をする側が安楽死させる社会問題が起こるほど、依存者 世労労働提供者間にも、権力問題は発生しています。濫用できる権力がこうした関係の中に潜在的にあり、それが支配抑圧になる危険性をはらんでいるということです。フェミニズム系の女性研究において、この危険性を考察したことがあったでしょうか。一度もなかったと思います。

フランスでは、1975 年が女たちにとって画期的な年だったとフェミニストたちの間で既成事実的に語られているようです。妊娠中絶の女の自己決定権が国民議会で可決された年だったからです。この自己決定権について、もちろん私は賛成ですが、しかしフランスでも日本でも殺される子どものことを考えるのはタブーになっています（『資料・ウーマン・リブ史』[1994], pp. 61-64）。私には、この決定権もまた女自身が生きるために無力な世代に対してする権力行使に、ある部分、見えてしまいます。これは今後とも考えるべき私に突きつけられた課題として残っています。

水平関係とちがって、垂直関係の中にある権力問題は、どうしても解決できないものとして残るのでしょうか。

すべての人間関係の原点には世代間にあるこの権力の記憶があるのではないか。すべての水平関係にある権力問題も、実は、世代間に潜在的にある権力が起源なのではないか。性社会関係の理論構築の本は、女性抑圧の起源探しから論を進めていますが、女性抑圧は *omniprésence* で *transversalité*（同時進行的に公私を含め社会のどの領域にもある）といって、ついに起源探しを諦めてしまいました（Battagliola, Fr[1986] pp. 19-76）。階級関係の理論枠組から出て、女性抑圧の起源探しをするなら、もしかしたら世代関係の中にこそ、見つかるのかもしれない。

しかし、もし垂直な世代関係の中でも権力は残してはならないとしたら、この関係から出発する、どんな平等理論が可能なのでしょう。どうしても平等になれない無力な世代を考慮する新しい平等理論はできるのか。私にとっては、これこそが世代社会関係の理論構築に賭けられた最大

の課題（賭け金）であり、これこそが西欧近代の全思想を根底のところまで揺るがすはずの問題なのです。

5 おわりに

結論に入りましょう。私がこの発表で言いたかったことを三点にまとめます。

第一に世代社会関係を分析する新しい方法論の提案です。一般的に言って、日本でもフランスでも、世代というときすぐ世代間継承のことだけを思い浮かべます。それでは片手落ちです。世代を分析する新しい方法論は、「対立矛盾の論理から脱け出して」、継承と革新、連続と断絶、相続と脱構築の *imbrication* 「鱗状の重なり合い」を緻密に分析できる方法論であってほしいと思います。

第二に西欧的な個人という概念の問い直しです。私はこの個人にあてはまらないひとたちをあるシンポジウムで人文科学系の用語で *sujet en génération* 「世代間にいる主体」「生成しつつある主体」の用語で呼んでみたことがあります（棚沢直子 [2004], p. 67）。社会科学系では、*acteur en génération* 「世代間にいる行為者」の用語がいいかもしれません。この主体、この行為者は、エリック・エリクソン流のライフサイクルとかライフステージの中にいる、あたかもひとりで生きているような、これまでどおりの個人では全くありません（エリクソン, E. H [2001]）。そうではなく、世代間の《他律性》の中で生まれて自己形成する主体、行為者です。そして、もしかしたら他者に介護されながらついに自己完結する主体、行為者です。「世代間にいる主体、行為者」の概念により、これまでの近代的な個人の概念は大幅に問い直されるはずです。

最後に、依存者とその世話労働の提供者との関係の分析による、新しい平等理論をつくる必要性です。これは世代間の権力問題を問うのが出発点になると思います。

これらの三点は、互いに関連があるので、おそらく同時に考える必要があるでしょう。

＊

＊

＊

以上、フランスでは男女関係から、日本では世代関係から家族を考えるちがいの広がりと深さが、少しは垣間見られたでしょうか。

最後に個人的なことをつけ加えます。私は日仏を往復しながら母になり私自身の母をなくしました。この往復により私が最初に気づいたフランス思想の欠陥は、その普遍性という自負でした。この普遍性の範囲に入らない日本のさまざまな「現実」を日々感じてきたからです。現代フランスの普遍性の概念は水平関係の理論を基盤にしています。垂直関係の分析から西欧的な普遍性を問い直せるはずの日本では、残念ながら、いまだに西欧理論の輸入応用がされています。日本の

フェミニズム理論はひとつの例です。

私が母になったとき、私は日仏のフェミニズム理論が今もってタブーにして扱わない母の puissance「潜在的な権力」の問題を抱えてしまいました。私が経験したことは、フェミニズム理論では男社会から集団として抑圧されてきたはずの女が、子どもに対しては抑圧者になりうるということだったのです。これは日本の中で生きてきたから感じたのかもしれない。

というわけで、日仏を比較するのに、世代社会関係という新しい概念用語から両国の集団史と個人史を同時に考えた方がいいと思うようになりました。ですから私にとってこの用語は日仏比較のためのひとつの方法的選択です。

【参考文献ならびに注】

- (1)『資料・ウーマン・リブ史』[1994]、ウイメンズ・ブック・ストア松香堂、第2巻。日本のウーマン・リブの闘士田中美津だけは、妊娠中絶の自己決定権に賛成しながら、これを子殺しと呼んでいる。
- (2) エリクソン、E. H. 他、村瀬孝雄他訳 [2001]、『ライフサイクル、その完結』<増補版>、みすず書房、(Erik H. ERIKSON/Joan M. ERIKSON: *The Life Cycle Completed, A Review Expanded Edition*, First published by W. W. Norton & Company, Inc., New York, 1982, reed. 1997)。
- (3) 棚沢直子 [2004]、『<母><父> どこまで来たか?』、『女性空間』、第21号、日仏女性研究学会年報、pp. 59-71。
- (4) Battagliola, Fr., D. Combes, A.-M. Daune-Richard, A.-M. Devreux, M. Ferrand et A. Langevin [1986, rééd. 1990] *A propos des rapports sociaux de sexe, parcours épistémologiques*, Centre de Sociologie Urbaine, Recherche effectuée dans le cadre de l'ATP du CNRS, "Recherches féministes et recherches sur les femmes".
- (5) Collin, Fr. [1995]、『La raison polyglotte ou Pour sortir de la logique des contraires』in EPHESIA (Ed.) *La place des femmes: Les enjeux de l'identité et de l'égalité au regard des sciences sociales*, Paris: la Découverte, pp. 669-676.
- (6) Collin, Fr. [1999] *L'Homme est-il devenu superflu? Hannah Arendt*, Paris: éd. Odile Jacob.
- (7) Derrida, J. et E. Roudinesco [2001] *De quoi demain..., Dialogue*, Paris: Fayard/Galilée.
- (8) MAXIDICO: novation:1 (X Dr.) Substitution d'une obligation nouvelle à une ancienne 2) (littér.) Innovation, nouveauté: プチロワイヤル辞典: 1) (法) 更改 (既存の債権を消滅させ、これに代わる新しい債権を成立させること)

(以上の発表は、東洋大学 ストラスブール3大学共同の日仏比較シンポジウム・シリーズ第3回

「依存者たちのゆくえ 世代間の絆をどうつくり直すか」,日時：2003年3月3日 9:30 - 18:15 ,
3月4日 12:30 - 18:00 ,場所：東洋大学白山校舎 雨水会館2階会議室,日・仏・英語の逐次
通訳,主催：東洋大学特別研究「これからの家族と経済・社会・文化のあり方に関する日仏比較
研究」でなされた。日仏両語による発表の原稿は,まず仏語で書き,ついで自由邦訳した。)

"Pour sortir de la logique des contraires"⁽¹⁾

en partant des différences entre la France et le Japon

Naoko TANASAWA

La transformation sociale, telle qu'elle apparaît sous forme de la faible natalité ou de l'augmentation de l'espérance de vie, constitue un sujet brûlant pour notre époque.

Dans ce colloque franco-japonais intitulé: "Quel avenir pour les personnes dépendantes? — Conflits et solidarités entre les générations —", nous nous proposons d'analyser cette transformation à travers les exemples comparés des "réalités" intergénérationnelles au Japon et en France.

Au Japon, le terme "génération" était d'usage courant depuis quelques décennies. Alors que les féministes japonaises des années 1980 parlaient, à propos de la nucléarisation des familles commencée dès des années 1960 au Japon, de la naissance de la "famille moderne", expression tirée du livre d'E. Shorter, les sociologues non féministes considéraient ce phénomène comme celui de la "famille des deux générations" (nisedai kazoku). En tout cas aucun sociologue japonais ne le traite sous le nom de la "famille conjugale" ou de la "famille centrée sur un couple" à la française. En France, on pense la famille sous l'angle du rapport homme-femme, mais au Japon il s'agit du rapport intergénérationnel. Jusqu'où peut-on mesurer cette différence tant dans son étendue que dans sa profondeur? Voilà notre problématique d'aujourd'hui. Pour cela nous nous proposons d'abord d'examiner les caractéristiques des rapports sociaux intergénérationnels dans l'ensemble des recherches sur les rapports sociaux jusqu'à nos jours, surtout en France.

I . Parcours épistémologiques

A partir des années 1980 en France, on assiste à un mouvement, parmi les féministes sociologues, de théorisation des rapports sociaux de sexe en lieu et place des gender studies dans l'anglophonie. Le fruit de leurs efforts a été exposé dans l'ouvrage intitulé: "*A propos des rapports sociaux de sexe, parcours épistémologiques*" (ouvrage collectif) en 1986.⁽²⁾ En partant des études sur les rapports sociaux de classe du marxisme, ce livre éclaircit les parcours épistémologiques en matière de la conceptualisation des rapports sociaux de sexe.

Quels sont les points communs entre les rapports sociaux de classe et ceux de sexe? Ils se résumeront ainsi:

Le premier point: le sexe ainsi que la classe est non pas substantiel mais relationnel.

Le deuxième point: le rapport de sexe n'est pas naturel mais social comme celui de classe. Ce livre

consacre à peu près un tiers des pages pour la démonstration du non biologique des rapports homme-femme.

Le dernier point: ces deux rapports se caractérisent par la force, le pouvoir, la domination, l'oppression, d'où l'approche commune de la dialectique des contraires entre les deux pôles antagonistes.

II . Caractéristiques des rapports sociaux de génération

Or ce livre fait à peine mention des questions intergénérationnelles. Ce mot "génération" apparaîtra, semble-t-il, à partir des années 1990 dans les domaines de la science sociale en France. Nous nous permettrons dès lors d'examiner nous-mêmes les caractéristiques propres à la génération.

Y a-t-il des points communs parmi la classe, le sexe et la génération? D'après nous, c'est oui et non.

D'abord oui, car la génération est avant tout relationnelle. En plus, les rapports intergénérationnels enfermés jusqu'ici dans le domaine privé doivent être analysés comme phénomène social, ce qui fut aussi le parcours des rapports sociaux de sexe.

Les rapports sociaux de génération, eux aussi, peuvent-ils être considérés comme ceux de force ou de pouvoir? Nous croyons que oui, mais presque toutes les communications de notre colloque d'aujourd'hui ne mettent aucunement l'accent sur cet aspect. Bien au contraire, on les considérera comme rapports d'aide. Et le terme "solidarité intergénérationnelle" est d'usage courant surtout en France. Les deux mots clefs pour analyser les rapports intergénérationnels sont bien solidarités et conflits entre les générations. Pourquoi? Nous voulons revenir à ce sujet plus tard.

En tout cas, grâce à cette approche nous pouvons certainement détailler à travers les rapports sociaux de génération, mieux que ceux de classe ou de sexe, les phénomènes communs contemporains dans nos sociétés, en France et au Japon. C'est d'ailleurs là axe important de ce colloque.

Pourtant ma position est plus radicale. Je suis seule, parmi les intervenants de ce colloque, spécialisée en études sur les femmes dans le domaine des sciences humaines. Par ailleurs je suis une "francologue" vivant essentiellement au Japon.

Je pense que les sciences humaines sont en général plus "radicales" que les sciences sociales. Et avec cette radicalité je voudrais repenser, en partant plutôt d'une tentative conceptuelle des rapports sociaux de génération, le parcours de la conceptualisation de ceux de sexe effectuée par les féministes françaises sociologues, et, à nos yeux, prise dans une certaine mesure dans la mouvance méthodologique des rapports sociaux de classe.

Et en tant que "francologue" j'aimerais mettre en éclairage certaines "réalités" japonaises qu'on ne peut, du moins jusqu'à présent et autant que je sache, découper par la pensée française. Ces "réalités"-là ne seraient certes pas propres au Japon, mais tout simplement on les a laissées dans l'ombre en France, et il se peut bien que l'on ne puisse les en sortir que par l'analyse des rapports sociaux de génération.

À la différence des deux rapports sociaux de classe et de sexe, ceux de génération sont verticaux. Cette différence, cette verticalité nous paraît "révolutionnaire", ce qui nous mènerait aux fondements mêmes des pensées occidentales de la modernité. L'analyse de cette verticalité pourrait, nous semble-t-il, remettre en cause le concept même de l'individu à l'occidentale basé sur cette fameuse "Déclaration des Droits de l'Homme et du Citoyen".

Et le terme de "génération" même nous paraît lourd de significations. La génération veut dire la classe d'âge. Certes, mais en même temps elle signifie: production, formation, création, voire innovation. On peut

"Pour sortir de la logique des contraires"

donc entendre par génération, l'ensemble de transmission et d'innovation au cours de la vie quand on passe d'une classe d'âge à l'autre. Françoise Collin a trouvé un mot bien adéquat à la place de celui d'innovation: "novation"⁽³⁾⁽⁴⁾, que je voudrais utiliser désormais en lui donnant mon total accord.

Si nous nous permettons de poser les deux pôles dichotomiques, même pour l'analyse des rapports intergénérationnels, ils ne sont plus antagoniques, contrairement aux rapports horizontaux de classe et de sexe. Dans les rapports intergénérationnels, la novation se fait "dans" la transmission; la discontinuité ou la rupture voire la nouveauté viendra "au sein même" de la continuité. Autrement dit, la transmission "à la fois" novation, la continuité "à la fois" discontinuité se feront dans la temporalité. Je pense un peu à Derrida "déconstructionniste" qui commence à insister, dans un livre publié en 2001⁽⁵⁾, sur la notion de l' "héritage". Mais les concepts tels que "capital symbolique" "reproduction" etc. dans le sillage de Bourdieu, ne s'accommoderaient peut-être pas de la conceptualisation des rapports sociaux de génération.

En fin de compte, pour analyser les rapports verticaux, on ne s'empêchera pas d'avancer la nécessité de créer une toute autre dialectique, sortant comme le dit Françoise Collin de "la logique des contraires".

Les deux termes dans les rapports verticaux intergénérationnels peuvent-ils être mis sinon antagoniquement mais du moins sur un pied d'égalité? A notre sens, c'est oui et non.

C'est oui, ou quasiment oui, surtout entre les jeunes et les moins jeunes qui sont déjà entrés dans le marché du travail. Certains sont, il est vrai, supérieurs aux autres par leur force physique, d'autres par leur force intellectuelle, ou bien par leur degré de maîtrise technique, ou par celui d'esprit innovateur, mais ils sont tous considérés comme capables de travailler grosso modo à part égale, même s'il y a des conflits intergénérationnels.

Mais les problèmes se poseront lorsque les deux termes de ce rapport ne seront pas ou ne pourront être jamais égaux. Ce sont d'abord des personnes qui se trouveront en quasi totalité hors du marché du travail et, pour cela même, qui ont été presque négligées dans toutes les sciences sociales sauf dans le domaine de la protection "providentielle". Il s'agit des "personnes dépendantes" pour vivre. Les sociétés modernes, qu'elle soit japonaise ou française, sont basées sur cette négligence, cette mise à l'écart, sauf dans le domaine privé. Le concept moderne de l'individu a exclu l'existence de ces personnes. "Les hommes naissent et demeurent libres et égaux en droits". En droits, certes! Dépendre des autres pour vivre aliénerait pourtant en acte ces droits en grande partie, tant pour les personnes dépendantes que pour celles dont elles dépendent. Tous les hommes et toutes les femmes commencent leur vie avec cet état de dépendance. L'existence de ces personnes ne sera visible que par la conceptualisation des rapports sociaux de génération dans sa pleine signification.

Parmi les personnes dépendantes—nouveaux-nés, petits enfants, handicapés mentaux, les malades de type alzheimer etc.—, nous pensons maintenant plus particulièrement au rapport type intergénérationnel entre les nouveaux-nés et les personnes qui les prennent en charge. Entre ces deux "in-di-vi-dus"⁽⁶⁾, la distinction(di-vi-sion) n'est pas si nette, surtout pour les premiers. Ceux-ci ne peuvent commencer leur vie qu'en acceptant l'altérité, qu'en s'identifiant aux autres. Leur formation ne se fera au début qu'en hétéronomie. Et les personnes qui les prennent en charge ne peuvent les soigner qu'en risquant, comme le dira M. Pfefferkorn, ou en restreignant leur propre autonomie.

III. Problème du pouvoir entre les générations

Dans ce rapport s'insérera inévitablement le problème du pouvoir. Puisque ce rapport d'aide n'est pas l'entraide; il est le rapport de "force" de travail non réciproque.

On se rappelle alors qu'avant l'époque moderne, et même après, partout où subsiste le système patriarcal, les rapports intergénérationnels sont bel et bien ceux de pouvoir et de domination, surtout entre le père et ses enfants. C'est d'ailleurs pourquoi tout un système moderne de pensées occidentales, en particulier françaises après le 19^{ème} siècle, est fondé sur la liberté, l'égalité et la fraternité, en enfermant les questions intergénérationnelles, pour ne plus y penser, dans le domaine privé. D'où une nécessité urgente de reformuler une nouvelle théorie d'égalité, avant tout à partir de la socialisation des problèmes des personnes dépendantes.

Nous voudrions approfondir encore plus ce rapport du pouvoir entre les générations. Peut-on le considérer d'emblée comme rapport de domination ou d'oppression? Nos sociétés contemporaines ont inventé un excellent dispositif conceptuel pour ne pas avouer que l'exercice de ce pouvoir équivaut assez souvent à une domination: c'est la fameuse "autorité parentale". Il est pourtant évident à nos yeux que ce dispositif ne recouvre pas toutes les "réalités" existantes telles que les mauvais traitements, la violence vis-à-vis des enfants. Certes il s'agit d'abus du pouvoir. Mais cet abus n'est-il pas l'appellation moderne de domination? ⁽⁷⁾

Un autre exemple plus radical: celui de l'avortement volontaire. Il semble exister maintenant parmi les féministes françaises un consensus sur l'importance de l'année 1975: celle de la réalisation de l'autodétermination de l'avortement de la part des femmes. Or pour cette cause—cependant je suis moi-même pour—, on ne parle jamais, chez les féministes françaises ainsi que japonaises, du droit à la vie de l'enfant-foetus, comme si c'était un tabu. ⁽⁸⁾ Ce problème reste à résoudre.

Le problème du pouvoir entre les générations reste-t-il, ou non, quasi impossible à résoudre?

Si oui, une série de questions se posent: reste-t-il une réminiscence de ce pouvoir dans tous les rapports humains? Est-ce cette réminiscence même qui est l'origine de tous les pouvoirs dans les rapports horizontaux? Dont ceux de sexe?

Si non, comment est-il alors possible de conceptualiser une nouvelle théorie d'égalité à partir de l'analyse des rapports sociaux de génération? Est-elle réalisable dans la mesure où les personnes dépendantes trouveraient une équivalence à l'égalité? Voilà un enjeu majeur pour nous pour la construction théorique des rapports hétéronomes et non réciproques, remettant en cause les pensées modernes dans leur fondement.

. . .

En guise de conclusion, nous voudrions résumer notre proposition en trois points:

Le premier point: proposition de tentative méthodologique propre aux rapports sociaux de génération. Il s'agit d'une autre dialectique qui nous permet d'analyser en profondeur l'imbrication entre transmission et novation, continuité et discontinuité, héritage et déconstruction dans la temporalité.

Le deuxième point: proposition de remise en question du concept occidental: "individu" tel qu'on le connaît au moins jusqu'à présent. Nous pensons provisoirement à cette appellation: "sujet en génération" dans le domaine des sciences humaines pour concevoir un nouvel "individu". Dans celui des sciences sociales, l' "acteur/agent de génération" sera peut-être bien. Cet "individu", ce sujet, cet "acteur/agent" n'a rien à voir avec celui conçu par Erik H. Erikson; il a pensé à l'adulte "in generativity" attaché à un seul stade

"Pour sortir de la logique des contraires"

de vie: celui de la maturité⁽⁹⁾. Par contre, le "sujet en génération" à notre sens commence sa formation en hétéronomie et finit éventuellement sa vie prise en charge par d'autres personnes.

Le troisième point: proposition de tentative d'une nouvelle théorie d'égalité, qui nous permettrait de repenser le problème du pouvoir en partant des rapports intergénérationnels, et surtout entre les personnes dépendantes et celles dont elles dépendent.

. . .

Je me permettrais finalement, si vous le voulez bien, de dire quelques mots sur ma propre vie. Faisant l'aller-retour entre le Japon et la France, je suis devenue mère d'un enfant et j'ai perdu très récemment ma propre mère.

Pendant ces allers-retours, je me suis petit à petit aperçue de la limite de la pensée française prétendue universelle que j'ai pourtant longtemps tenté de m'approprier; tellement j'avais une grande admiration pour elle. J'ai vécu quotidiennement des "réalités" japonaises qui me semblent se trouver hors de son cadre. La plus importante différence me paraît la vitesse du temps au cours de l'histoire: l'Occident qui a inventé la notion de progrès et de civilisation et qui est fort en théorie des rapports horizontaux, et le Japon qui a laissé mûrir sa propre culture sans penser cependant à la question du progrès et qui n'a jamais élaboré une quelconque théorie, même celle des rapports verticaux.

Devenue mère, j'ai eu un problème: celui que je qualifierais de "la socialisation de la puissance maternelle". Ma découverte était inattendue: je pouvais être "opresseur" de mon propre enfant, ce qu'aucun féminisme français et même japonais ne m'a appris.

En me rappelant l'héritage de ma mère et l'innovation grâce à mes expériences françaises, j'ai tenté, pour les études comparatives franco-japonaises, d'élaborer le concept : rapports sociaux de génération.

(le 27 février 2003)

Références:

- (1) Françoise COLLIN: "La raison polyglotte ou Pour sortir de la logique des contraires " in EPHESIA (Ed.): *La place des femmes : Les enjeux de l'identité et de l'égalité au regard des sciences sociales*, Paris, La Découverte, 1995, pp.669-676.
- (2) Françoise BATTAGLIOLA, Danièle COMBES, Anne-Marie DAUNE-RICHARD, Anne-Marie DEVREUX, Michèle FERRAND et Annette LANGEVIN: *A propos des rapports sociaux de sexe, parcours épistémologiques*, Centre de Sociologie Urbaine, Recherche effectuée dans le cadre de l'ATP du CNRS, "Recherches féministes et recherches sur les femmes", 1986, rééd. 1990.
- (3) novation:1) (Dr.) substitution d'une obligation nouvelle à une ancienne 2) (littér.) Innovation, nouveauté (*MAXIDICO*).
- (4) Françoise COLLIN: *L'Homme est -il devenu superflu? Hannah Arendt*, éd. Odile Jacob, Paris, 1999, p.208.
- (5) Jacques DERRIDA et Elisabeth ROUDINESCO: *De quoi demain... Dialogue*, Fayard/Galilée, Paris, 2001, pp. 11-40.
- (6) L'étymologie de l' "individu" selon *Petit Robert*: 1242; lat. individuum "corps indivisible".
- (7) Le rapport de force intergénérationnel est pourtant mobile: "l'autorité parentale disparaît dès que l'enfant

arrive à majorité et avec la vieillesse les parents se trouvent devant un renversement de situation. (...) On le trouve déjà dans la mythologie grecque, entre autres dans l'histoire d'OEdipe. (...) Comment (re)interpréter ce mythe d'OEdipe selon lequel au commencement était la tentative d'infanticide des parents? Ne peut-on pas considérer cette légende comme l'histoire du rapport de force intergénérationnel, mobile(...)? Une histoire de tentative d'infanticide avant celle du parricide?" (Naoko TANASAWA: "Les rapports sociaux de génération: une nouvelle conception?" in *Cinquantenaire du Deuxième sexe*, sous la direction de Christine DELPHY et Sylvie CHAPERON, collection Nouvelles Questions féministes, Eds. Syllepse, Paris, 2002, p.257). Il faudra tenir compte de cette mobilité de pouvoir intergénérationnel pour formuler une nouvelle théorie d'égalité.

- (8) Sauf une militante du M.L.F. japonais qui a considéré l'acte de l'avortement comme un homicide conscient (cf. mon article du note (7)). Selon la tradition japonaise, l'enfant avorté (mizuko) est censé être un membre de famille, c'est-à-dire un être humain; ce serait à nos yeux l'envers du manque de conceptualisation stricte de l'Homme.
- (9) Erik H. ERIKSON/Joan M. ERIKSON: *The Life Cycle Completed*, A Review Expanded Edition, First published by W.W. Norton & Compagny, Inc., New York, 1982, reed. 1997. Nous l'avons consulté en traduction japonaise, Misuzu Shobo, Tokyo, 2001.

Colloque franco-japonais organisé par les trois Universités strasbourgeoises et l'Université Toyo

Quel avenir pour les personnes dépendantes?
—Conflits et solidarités entre les générations—

lundi 3 et 4 mardi mars 2003
Hosui Kaikan
Université Toyo
5-28-20 Hakusan Bunkyo Tokyo